

高等学校における「麻しん」に関する保健指導  
— 公立高校 3 校の実践を通して健康教育の課題を探る —

教科・領域教育学専攻

生活・健康・総合内容系コース

M08247F

森田富士子

1. はじめに

麻しんは死亡や後遺症を招く重大な疾患である。平成 19 年には、麻しんの感染拡大により大学や高校が休校措置を余儀なくされた。これを契機に、国は、平成 20 年度から 5 年間、高校 3 年生の麻しん予防接種の実施及び麻しん対策ガイドラインを活用した麻しん対策を学校に求めた。平成 20 年度では、高校 3 年生の 12 月の全国接種率は 58.2% であり、国が掲げた接種率 95% 以上の達成には至らなかった。全国の予防接種率が低いなか、A 高校は、予防接種率 95% を達成した。

本研究では、A 高校の保健指導をもとに、K 市内の公立高校 3 校で共通した実践を行い、① 高校生の麻しんに関する正しい知識の普及  
② 高校 3 年生の麻しん予防接種率の向上  
③ 学校関係者の協力と保護者との連携  
の 3 点及び下記の仮説の妥当性を麻しん指導の研究実践と質問紙調査で検証し、学校教育の指導の有効性、高校における効果的な健康教育の方法と課題の考察を行うものとする。  
仮説 1：麻しん予防接種率は、どの高校においても、学校の麻しん指導による普及啓発で向上する。

仮説 2：生徒の麻しんの知識や接種行動は、指導を担う教員や保護者との連携により変化する。

2. 方法

A 高校が行った麻しんに関する指導（以下、麻しん指導と略す）の実践例をもとに、A、

B 及び C 高校の 3 校で共通理解を図った上で、各々の学校の特性にあった保健指導の計画を立案し、麻しん指導の実践を行った。また、先行研究や調査をもとに、麻しん指導を受ける 3 年生の生徒、麻しん指導を担当する教員、3 年生の保護者の各々を対象とした質問紙を作成し、調査、分析、実践の評価を行った。集計、解析には SPSS12.0J for WINDOWS を使用した。

3. 結果

1) 学校での麻しん指導と予防接種率

以下を基本に、3 校で麻しん指導を進めた。生徒への麻しん指導は、年度当初に麻しんの年間計画を立て教員の共通理解を図るとともに、麻しんリーフレット、保健日より、麻しん啓発ビデオを活用しての HR 指導を進めた。保護者への啓発は、学校からの資料を配布し、保護者懇談会時に接種勧奨を行った。また、A 及び B 高校においては、学校保健委員会において、麻しんに関する啓発を取り上げ、教員ならびに保護者の共通理解を図った。

各校の指導経過は、A 高校の接種率は 6 月が 47.6% であった。接種勧奨、麻しん講話や啓発ビデオによる保護者への啓発を計画的に従って進め、9 月には、予防接種率が 92.1% となった。その後も、未接種者への個別指導を進め、1 月の予防接種率は 97.7% となり、国の目標である 95% を達成することができた。これは、前年度からの麻しん指導の実績と教職員の意識が高いという A 高校の特徴による。

B高校では、6月の接種率は12.8%であったが、保健主事の講話や接種勧奨により、9月の接種率は26.8%となった。計画に基づき、養護教諭が全クラスで麻しん指導を行い、未接種者の個別指導を進めたところ、1月の予防接種率は73.5%となった。これは、教員の連携によるHR指導の充実があったかと考えられる。一方、C高校の6月の接種率は10.7%であった。新型インフルエンザの流行のため指導計画が大幅に遅れたために、9月の予防接種率は23.3%にとどまり、HRで啓発ビデオ視聴指導を進めたが、1月の接種率は42.7%にとどまった。

## 2) 質問紙調査結果

(1) 生徒を対象とした調査結果から、いずれの学校においても、麻しんを「軽い病気」としていた割合が、後期に減少するなど、麻しんに対する理解が深まった。また、生徒の麻しんの情報源は、「学校からの情報」と回答した割合が最も多く、次いで家庭からであった。

(2) 教員を対象とした調査結果から、麻しん指導を進めるために「指導時間の確保」が必要であること及び「学校と家庭の連携」が必要であると考えていることが、明らかとなった。

(3) 保護者を対象とした調査結果によれば、「学校からの情報で麻しんを理解した」と回答した割合が高く、高校生の麻しんに関する知識理解の普及には、保護者への啓発活動が重要であると考えられる。

## 4. 考察

### (1) 学校と保護者の連携について

学校が保護者との連携を図る方法として、養護教諭が専門的な立場で保護者に話す機会を設けることは、学校と保護者との連携を深める一つの方法と考えられる。

### (2) 指導教材について

ビデオを活用した指導後、全校生徒の麻しん知識の正答率が高まったことから、麻しんの知識や理解を深めるためには、麻しん啓発ビデオ

が有用な教材であると考えられた。

### (3) 仮説について

「仮説1」：麻しん予防接種率は、2校で、学校の麻しん指導による普及啓発により向上した。1校では、麻しん予防接種率が向上しなかった。平成21年春の新型インフルエンザの大流行による休校が学校教育に影響し、麻しん指導が大幅に遅れたこと、生徒や教師の意識が新型インフルエンザに向けたことが、麻しん指導に影響を及ぼしたことによると考えられる。以上より、仮説1は本研究で否定されたとは言えず、今後のさらなる検証が必要と考えられる。

「仮説2」：麻しん予防接種率が高い学校では、保護者全体への啓発活動が進められ、教員は、保護者啓発の内容や方法に関して認識が高かった。以上から、仮説2に関しては妥当と考えられるが、仮説1とあわせ、さらなる検証により、確証が得られるものにする必要がある。

(4) 麻しん予防接種率を上げる方策の提言  
接種率を上げる方策には、学校の特徴を生かした指導が効果的であること、年度毎に、指導の反省点や効果があった点を学校保健委員会で検討し、関係者で理解すること、があげられる。

5. まとめ  
公立高校3校で麻しん指導の実践を行ったが、指導が計画以上に取り組めた学校ほど、①麻しんに関する正しい理解が進むとともに、②高校3年生の麻しん予防接種率が向上し、③学校関係者の協力と保護者との連携を進めることができた。

以上より、予防接種の意味や接種率向上のためには、学校教育全体での取組みや保護者への働きかけなど、関係者全員での共通理解と計画的な指導が、健康教育の充実には欠かせないものであることを示唆するものであった。

主任指導教員 松村 京子  
指導教員 鬼頭 英明